



第 141 号

令和 8 年 7 月 17 日発行

可 見 市 教 育 委 員 会

可 見 市 教 育 研 究 所

可 見 市 広 見 1 丁 目 5 番 地

TEL(0574)63-4841

e-mail :koyoikukenyu@city.kani.lg.jp



形骸化に歯止めをかけるもの

可 見 市 教 育 長 堀 部 好 彦

■教育実践の宿命に抗う

どんなに優れた実践も放っておけば形骸化が始まる、私はそう考えています。

新たな学校行事、新たな学年の取組を考え全職員で一致団結して大成功。でも、取組も 2 年、3 年と継続する中で、当初共通理解した“大切なもの”が徐々に薄れ、実践の手段ありき、昨年と同じやり方で、となってしまう。

そんなことはないでしょうか。これは、教育実践の宿命であるような気がします。

私たちが進めている未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」を育む教育も、放っておけばすぐに形骸化します。教育実践の形骸化に歯止めをかけるものは、何なのでしょう。

■どんな「笑顔の“もと”」を育むのかを問いつける

(1)自己肯定感への問い

3 年前、今の教育振興基本計画を策定する会議で自己肯定感が話題になりました。私は、自身の実践を振り返りながら、努力を重ねて「自分にはいいところがある」という感情が湧き上がるような体験を積みせたいと主張しました。

しかし、会議メンバーの一人が、努力して何かできるようにならないとだめなのか、「今の自分のままでいいよね」と自分を肯定する気持ちは未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」にはならないのか、と語っておられました。

また、これは 2 年前のこと。市のいじめ防止専門委員会特別顧問の尾木直樹先生も、同じ見方で私の考えへの異論を次のように教えてく

だしました。

～教育長さんの見方を強調し過ぎると、自分にいいところがないといけないという感情を誘発することになるわよ。「今の自分のままでいいよね」とありのままの自分を尊重する自己肯定感も、今の子どもには必要なのよ。～

可 見 市 で は、 け が え の な い 自 分 の い の ち を 見 つ め、 あ り の ま ま の 自 分 を 尊 重 す る 「 い の ち の 教 育 」 を 構 築 し、 今 後 「 笑 顔 の “ も と ” 」 を 育 む 教 育 の 中 核 に 据 え た い と 考 え て い ま す。私自身が自己肯定感とは何かを問い続けていることが、この「いのちの教育」を考える原点となっています。

(2)授業改善に目的は存在しているか

各校の学校所員の方々と構成する市の授業改善サポートチームによる授業改善が進んでいます。授業でこそ育むことができる「笑顔の“もと”」とは何か、何のために授業改善に取り組むのか、この問いに各校が向き合ってくださいに感謝しています。

主体的・対話的で深い学びは道半ばであるとの評価があります。私たちは文科省が主張するこの学びを授業改善の視点に位置付けていますが、これは学びの様相であり手段です。

手段は目的を実現するためにあります。主体的・対話的で深い学びも、その目的への問いを失った時、形骸化が始まるのです。

各校の授業改善が、常にその目的に立ち返るものであってほしいと願っています。

形骸化に歯止めをかけるもの。それは「笑顔の“もと”」を問い続ける人の存在です。



可児市の外国籍児童生徒の現状

「共に生きる」ために「ちがい」を「豊かさ」へ

～多様な背景を持つ子どもたちに寄り添う視点～



可児市の現状と包括的な支援体制

今年6月1日現在、本市の公立小中学校には943人の外国籍児童生徒が在籍しており、全児童生徒数の12.6%を占めています。また、市内には44カ国もの外国籍市民の方が住んでいます。国籍や言語、背景の多様化が進む中、外国籍児童生徒への支援と多文化共生教育は、本市全体の重要な柱です。

本市では、初めて転入する市民に対して、市役所内の各課が連携し初期対応をします。その後、初期適応指導教室「ばら教室 KANI」をはじめ、国際教室の設置や通訳サポーターの配置、可児市国際交流協会等との連携により、「不就学ゼロ」を目指した多角的なアプローチを継続し、児童生徒を包括的に支援しています。



【ばら教室 KANI の様子(左：登校日 右：修了式)】

一方で、外国籍児童生徒が比較的少ない「散在地域」の学校への支援や、保護者も含めた地域社会への参画促進、子どもたちの将来を見据えたキャリア支援など、多様化するニーズへ対応する施策の充実が急務となっています。

「話すこと」と「学ぶこと」のちがい

近年は定住化が進み、日本生まれ日本育ちの外国籍児童生徒も増加傾向にあります。学校では「日常会話はスムーズなのに、授業が理解できていないようだ。」という声がよく聞かれます。日常会話の「生活言語」は1～2年で身に付きますが、授業の言葉や概念形成、抽象的な思考に必要な「学習言語」の習得には5～7年以上の支援が必要です。「話すこと」と「学ぶこと」は異なるという認識をもつことは、外国籍児童生徒を理解するうえで重要な視点です。

すべての“かにっこ”が輝く学級づくりへ

子どもたちの日本語は、学級での仲間との日常的な関わりや共に学び合う中で豊かに育まれます。今すぐできる工夫のひとつに「やさしい日本語」の活用があります。一文を短くする、主語を明確にする、専門用語を言い換えるといった配慮とかかわりが、子どもたちの安心感と主体的な参加につながります。昨年度、名古屋出入国管理局の出前講座で、多文化共生や「やさしい日本語」について学んだ学校もあります。

可児市で育った子どもの声

「僕は将来、異なる文化をつなぐ架け橋のような存在になり、人の役に立ちたい。みんなに言いたいことは『違いを恐れないでほしい』ということ。あなたの生い立ちは、あなたの力になります。」—これは、昨年度、市内の中学校を卒業した外国籍生徒が後輩へのメッセージとして残した言葉です。

また、今年教育実習生として戻ってきた本市小中学校の卒業生は、レポートに次のように書いていました。「外国籍の児童生徒が多い環境で育ち、誰かを特別視することなく、一人一人の違いを個性や可能性として認め、同じ仲間として関わることの大切さを学ぶことができたと思います。」

人との関わりを通して育つ心

「ちがい」に触れることは、子どもたちの視野を広げ、他者を思いやる心を育むことにつながります。また、人の多様な背景を想像し、「よさ」や「強み」を生かすことで、「ちがい」を克服すべき壁ではなく「学級や地域を豊かにするリソース」として捉え直すこともできます。決して簡単なことではありませんが、この社会で、異なる人と共に生きる子どもたちに必要な資質です。子どもが安心して自らの可能性を信じてそれぞれの「笑顔の“もと”」を育み、「ちがい」を「豊かさ」につなげるみんなの小さな一歩が、よりよい未来につながることを信じています。

(教育委員会 学校教育課 青山 岳史)

不登校児童生徒の支援

学校の中の“間”^{かん} ～ 子どもたちの「居場所」をつくるということ ～

1. 人間（じんかん）の間（かん）とは、 つながり

20代のころ、私が尊敬する作家の書籍を読んでいて、「人は一人であれば、人のままだが、人と人との“間（かん）”（世間、社会、つながり）によって初めて、人間という存在になる。」という言葉に出会い、大変感銘を受けました。それ以来、私は教育の現場で、これまで関わった子どもたちに対して「人と人とのつながりの中で、本当の人間になっていく。」ということや「あなたは決して独りではない。」というメッセージを事ごとに伝えてきました。

「人間」という言葉は、もともとは「じんかん」と読んでいたようです。余談ですが、日本でも広く知られている「人間万事塞翁が馬」という故事成語があります。この言葉も中国の古典『淮南子（えなんじ）』人間訓（じんかんくん）に由来していることから分かるように、元来は「じんかんばんじさいおうがうま」と読まれていました。「人の世の幸不幸は予測がつかない。」という意味からも、「人間（じんかん）」とは「人の世」、もっと言えば、「人と人とのつながりによって構成される場」そのものを意味していると言えます。

2. “居場所” のもつ3つの役割

話を戻して、冒頭の「人は、人と人との間（かん）によって人間（にんげん）となる。」という言葉についてですが、私は、この「間（かん）」つまり「人と人との心地よくつながれる場」が、児童生徒にとっての「居場所」になっていくと考えています。心理学において「居場所」には、主に以下の3つの役割があると言われます。

①物理的な居場所

（大きな集団から一時的に離れ、心のエネルギーを回復させる場所）

②安心感を得られる心理的な居場所

（ありのままの自分を受け入れてくれる場所）

③自己肯定感を満たせる社会的な居場所

（集団の中で自分に役割があり、他者から必要とされていると感じられる場所）

3. 寄り添う「人」が拓く、校内の“居場所”

不登校傾向にある児童生徒や学級に入りづらさを感じている児童生徒にとって、校内教育支援センターや相談室等が、学校内の「居場所」としての大きな役割を果たしています。可児市では、同センターの設置を令和6年度から段階的に拡充し、現在13校に設置しています。先の「居場所」の3つの役割のうち、①は「環境（もの）」の面が大きいですが、②と③については、「人」の面が重要です。ここで鍵を握るのが、各校に配置された専属の支援員の先生方の存在です。

昨年度からこれまで、すべての設置校の支援員の皆さんとお話ししてきました。その場の安心感を土台に置き、児童生徒の選択や自己決定を尊重されながら、交流や学習などを通して、人との関わりの中で自己肯定感や他者受容感を育む支援に大変感じ入りました。ある学校では、朝、駐車場から校舎に入りづらかった児童に対して、支援員の先生が毎朝、声をかけに行き、根気強く寄り添い続けたことで、安心して校内教育支援センターに入り、一日を過ごすことができるようになったというエピソードも聞きました。

4. 確かな「間（かん）」である居場所から、 未来の笑顔へ

「人は一人であれば、人のままだが、人と人との“間（かん）”（人と人との心地よくつながれる場）によって初めて、人間という存在になる。」学校という社会の中で、子どもたちが確かな「間（かん）」を感じ、自分らしくいられる「居場所」を保障することは、これからも欠かせないことです。

こうした「居場所」が子どもたちの「笑顔の“もと”」を生み出し、未来の笑顔につなげるための確かな足がかりの場になると思っています。



え
ん
か
ん
の
“
も
と
”
笑
顔
の
“
も
と
”

（教育委員会 教育研究所

青木 裕介）

特別支援教育

通常学級における特別支援教育の充実から育まれる「笑顔の“もと”」



■可児市の特別支援教育の方向性

令和7年度、「可児市教育支援の手引き」が大幅に改訂されました。今回の改訂では、特別支援教育は、通常学級を含む学校教育全体で推進していくという考え方を再確認して、インクルーシブ教育の推進に向けて、包括的な教育支援と通常学級における特別支援教育の充実を重点として取り組んでいます。

■通常学級における特別支援教育とは

通常学級における特別支援教育の基本は、どの子ども安心して参加できる学級づくり、どの子ども分かる授業づくりです。

特別支援教育というと、障がいに関する理解や個々の特性に応じた指導方法が必要だと考えられがちですが、通常学級で大切なのは、目の前の子どもたち一人ひとりを丁寧に理解し、それぞれの学習の進め方やつまずきに応じた支援を工夫することです。温かく受容的な学級の雰囲気の中で、子どもたちが安心して学べるのが、その土台となります。

■まずは学級全体の学びやすさを整える

どの子ども参加しやすく、どの子どもにも分かりやすい授業づくり（授業のユニバーサルデザイン化）を進めます。例えば、絵や写真、映像、具体物など情報の視覚化。見通しを持たせ、時間や活動を区切る（スモールステップ）など時間の構造化。指示を短く簡潔に、終わった後の指示も伝えるなど指示の明確化。掲示物や音・光など刺激物の調整。ペアやグループ学習など学習形態の工夫。タブレットなどのICT機器の活用などを工夫することで、どの子ども学習活動に参加している実感・達成感を持てる授業づくりを進めます。



■個に応じた支援を組織的に進める

学級全体への工夫を重ねても、学習に困難を抱え、授業中の活動に参加しにくい子どもや、行動面でつまずきを示す子どもがいます。

そのようなときは、すぐに特別な学びの場を考えるのではなく、まずケース会議や校内支援委員会等で丁寧にアセスメントを行うことが大切です。特別支援教育コーディネーターや関係職員と連携しながら、個別の教育支援計画を作成し、組織的・計画的・包括的に支援を進めていきます。個の特性や必要に応じた支援を丁寧に重ねることで、子どもが安心して力を発揮できる環境が整っていきます。

■特別支援教育サポート事業

市の特別支援教育サポート事業として、療法士の訪問や特別支援教育サポートチームによる相談支援を行っています。学校の困り感に応じて専門性の高い先生方が関わることで、支援の視点が広がり、より適切な対応を検討することができます。特別支援教育サポート事業を活用することで、学校だけでは対応が難しい課題に対して、サポートチームが学校と一緒に考え伴走して包括的な教育支援を進めていきます。

■「笑顔の“もと”」を育む支援の基盤

通常学級における特別支援教育が充実することで、どの子ども安心して過ごせる学級、どの子ども参加できる分かりやすい授業が実現していきます。それは、特定の子どもへの支援にとどまらず、学級全体の学びやすさを高め、すべての子どもたちの育ちを支える包括的な教育支援の基盤となり、子どもたちの不適応や問題行動の未然防止にもつながります。

日々の授業や学級経営の中で、子どもたちの「分かった」「できた」「安心した」を積み重ねていくことが、やがて一人ひとりの「笑顔の“もと”」を育てていくと思います。

（教育委員会 教育研究所 神谷 智之）



転入者の声



「アップデート」の必要性 ひしひしと…

可児市立蘇南中学校 教頭 竹内 幸正



10年間お世話になった可児市、そして、そのうち7年間を暮らした（文字通り）蘇南中に再び勤務させて頂いております。全校生徒108名の白川中から、約10倍、1088名の蘇南中へ。なかなかの振幅に苦笑しつつも、あっという間に当時を思い出し、ひとまず無事に(?)8年目をスタートできました。

蘇南中は、当時も今も変わらず、県下のマンモス校。外国にルーツのある生徒は、全校生徒の3割に達しようとしています。特別支援学級は11クラス、もちろん通級指導教室や校内教育支援センターもあります。

私自身は2年生1クラス、3年生知的学級1クラス、3年生国際教室1クラスの国語の授業を担当しています。言語や特性の面で困難さを抱えた生徒が多く在籍する中で、誰もが「わかった・できた」と感じられる授業にするために、日々もがいております。教材研究や指導方法の試行錯誤が楽しいです。

一方で、思うように進まない「働き方改革」、なかなか浸透しない「ウェルビーイング」、老眼、腰痛、中性脂肪等々、課題も盛りだくさんです。ルロイ修道士は「困難は分割せよ」と仰いますが、なかなか苦しいです。iPadもまだ使いこなせていません。

一部識者の認識では、「シンギュラリティ」は2045年から2026年へと前倒しされた模様。社会の変化は益々大きく、次期学習指導要領改訂に向けた論点整理を読んでも、「AI時代の英語教育をどうしていくのか？」等、現場はこれからも、外的要因に翻弄されていくのでしょう。

であるならば、今自分にできることは何か。それは「自分自身のアップデート」に他なりません。もっともっと多種多様な課題に対応できるよう、地を這うように黙々と、自分自身を鍛え、アップデートしていきます。

「まず、先生が笑顔で！」

可児市立広見小学校 教諭 安藤 みほ



加茂郡の小学校では、高学年を担当し、合唱を核にして伸び伸びと学年・学級経営をさせて頂きました。素晴らしい先生方に囲まれ、本当に幸せで、充実した3年間でした。

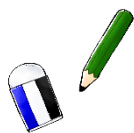
可児市に戻り、勤務校となった本校は、大規模校です。朝の出席確認の仕方やアレルギー対応など、覚えなくてはならないことが多く、毎日を必死に過ごしてきました。

学年・学級経営もスムーズなスタートではありませんでした。自分の考え方や指導の方法が凝り固まっていたせいだと思います。子どもたちの実態に合った指導ができず、その良さを十分に引き出してあげられない自分にもどかしさを感じました。

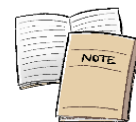
そんな中でも、職員室に戻るとほっとしました。先生方がみんな明るく、笑顔なのです。いつも、先生方に温かい声をかけて頂いたお陰で、課題だらけの毎日でもそこまで不安を感じずに過ごすことができました。この3か月間、先生方に励まされながら試行錯誤してきたことで、ようやく自分のペースをつかんできたように思います。

本校の今年度の重点に「まず先生が笑顔で」という言葉があります。先生方の笑顔を増やすために、私にもできることはないかと考え、感謝の気持ちを素直に伝えようと思いました。また、私自身も笑顔でいようと思いました。私のような年上の者が不機嫌でいると、若い先生方は委縮してしまいますから。そして、協力を求められた時は、喜んで動こうと決めました。

教員の笑顔は、子どもたちに伝染します。よい学校は、教員と子どもたちの笑顔が溢れていると思います。私は、自分のできることで、笑顔の環境をつくることに貢献したい。今はまだ、学校のために役に立てることは少ないですが、小さなことから始めていきたいと思っています。今日も笑顔で頑張ります！



令和8年度 教育実践論文募集



本年度も教育実践論文を募集します。

昭和58年度から始まった教育実践論文の募集も今年度で43回目となります。

日頃、可児市教職員の皆様が子どもたちの確かな成長を願い、日々、創意工夫を凝らしながら展開されている教育実践を論文としてまとめてみませんか。

積極的なご応募をお待ちしております。参考に、昨年度の領域別応募数・入賞者を掲載します。

1 令和7年度実践論文応募状況

領域別	数	領域別	数
教科	22	学級経営	0
道徳	1	生徒指導	0
特別活動	1	健康安全	0
特別支援教育	3	管理経営	1
総合的な学習の時間	1	合計	29

2 令和7年度実践論文審査結果

※ 職名・所属名は、令和7年度時点。敬称略。

☆ 優秀賞（学番順）

兼松 明	教諭	蘇南中学校
加藤 祐輝	教諭	蘇南中学校
西原 裕貴	教諭	西可児中学校
渡邊 草太	教諭	西可児中学校
石井 雅大	教諭	東可児中学校

☆ 新人賞

住 果花	教諭	蘇南中学校
------	----	-------

☆ 特別賞

奥村 尚浩	校長	南帷子小学校
-------	----	--------

☆ 優良賞（学番順）

樋口 さな江	教諭	桜ヶ丘小学校
大久保 勇人	教諭	蘇南中学校
若宮 暖	教諭	蘇南中学校
岩越 大透	教諭	蘇南中学校
稻越 智子	教諭	西可児中学校
石井 貴大	教諭	西可児中学校

☆ 奨励賞 16名



《募集要項》

(1) 目的

可児市の学校教育課題の克服をめざした小学校、中学校の教職員の創意ある実践研究を広く募集し、もって実践意欲の喚起と指導力の向上を図る。

(2) 内容

- ① 小学校、中学校の児童、生徒の指導および管理運営に関する実践研究であるもの
- ② 問題意識が明白で、仮説・実践・検証の過程が具体的かつ累積的で、一貫性のある実践研究であるもの
- ③ 他の公の機関に発表していないもの

(3) 執筆要領（要綱は、次の通りです。）

- ① 使用言語 現代仮名遣いで書かれた日本語
 - ② 使用ソフト Word（様式は岐阜大学教育学部同窓会HPからダウンロード可能。）
 - ③ 本文の様式
A4版6ページ（22字程度×43行～50行×2段横書き）余白 上下左右各25mm程度）
・1ページ目の冒頭に研究主題・（副主題）・所属・職名・氏名を記載する。（46文字程度×5行以内×1段）。上下に二重罫線を引く。
・1ページ目に「概要」（46字程度×10行）を記載する。（入賞者についてはこの「概要」をそのまま論文集に掲載する。）
・MS明朝（見出しは、MSゴシック）
 - ④ 写真・図・表の使用
・図と表は内容が読み取れる程度の縮小に留める。
・図と表は必ず区別し、図1・表1からそれぞれで通し番号を付け、内容を簡潔に表現した見出しを論文全体にわたってつける。
 - ⑤ 添付資料
本編以外の資料は添付しない。ただし、審査の対象としないが、実践の取り組み内容（独自作成教材に限る。）を示す二次元コードの挿入は認める。
 - ⑥ 参考文献等
参考文献等がある場合は、論文の最後に年代順で一括掲載する。
 - ⑦ その他
写真等は児童生徒が特定されないように留意する。
- (4) 提出先 可児市教育研究所
- (5) 提出方法 原則、PDF化した電子媒体で提出
- (6) 提出期限 令和9年1月8日（金）正午

※ 詳細は、各校に送付しました「令和8年度 教育実践論文募集要項」をご確認ください。